

淡交

今月の七事式

茶箱付花月之式(二)

点前の解説

炭所望・風炉(一)

特別読物

千少庵と蒲生氏郷

昭和24年5月17日
第三種郵便物承認
平成23年4月1日発行
(毎月1回1日発行)
通巻789号

4

平成二十二年



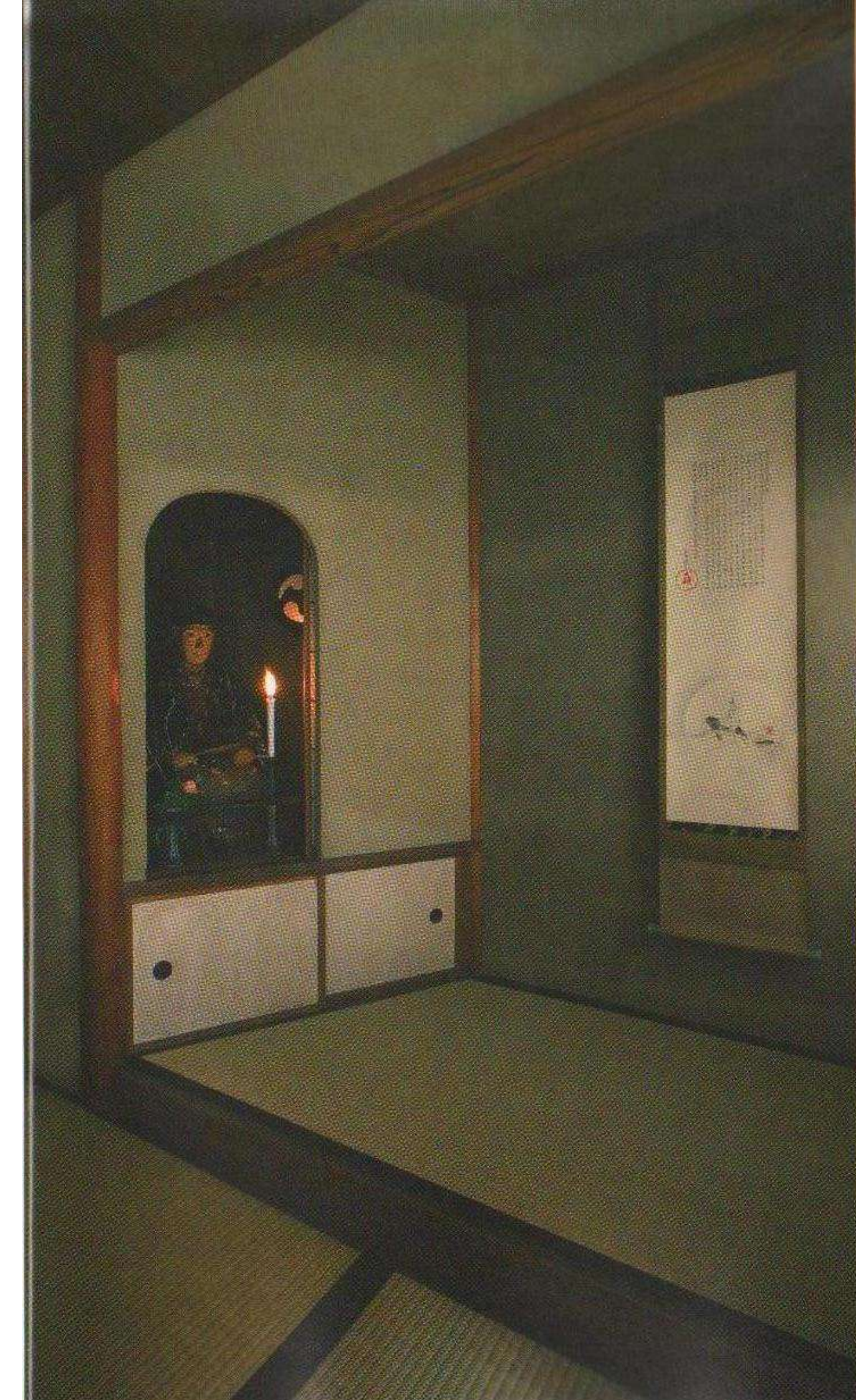
趣向の愉しみ

茶道具は語る

今日庵文庫長

筒井紘一

ついでに



追善の取り合わせ

右頁／清風与半筆 魚籃観音絵 伊本三猿斎賛

写真／大道雪代

追善と茶道

今月は追善の茶会での取り合わせを中心に述べてみようと思います。追善の茶会ということでは、当然のことながら利休居士の年忌が最も大きな行事ということになります。利休居士の四百年忌が行われたのは、早いもので、二十年も前の平成二年（1990）のことでした。江戸時代に入ってから茶道界は、大きなうねりを見せながら進展してまいりました。五十年ごとの年忌によるうねりです。大局的に考えるならば、うねりの頂点に位置するのが利休年忌でありました。すなわち、江戸時代の茶道界は五十年ごとの利休居士の年忌を中心に進展を繰り返して来たということなのです。

それがどれほど大きなものであったかは、利休年忌の年には、三千家は勿論のこと藪内家や江戸千家、石州流の各派でも連続した茶会を催していることから分かります。半年間くらいをかけて多いときには百会行われ、その場合は、季節が移り変わって行きますから、利休居士の画像の掛物などは替わりませんが、他の道具や懐石は少しずつ変えていきます。懐石の材料は当然精進です。

また、五十年ごとの年忌や祥当の命日ばかりでなく、三千家では毎月の二十八日に交替で法要と茶会が行われております。このときには全国から多くの社中・同門が大徳寺の聚光院じゅうこういんに集まって参ります。この情景を見ていると、人間にとって茶道とは何なのかということ

とを感じないわけにはまいりません。法要に参列されている方々の何人が、ご自分の先祖の百回忌をされているのだろうかと考えたときに感じる私の感慨です。茶道による心のつながりが、いかに強いものであるかに思いをいたすばかりです。今年もまた、全国の各地で毎歳の二月二十八日か三月二十八日前後には、多くの利休年忌の法要と茶会が行われたことと思います。利休居士の画像が、長谷川等伯筆の画像を始めとして近代に至るまで、枚挙に暇がないほどに多く存在するのは、そうした理由によるものでしょう。読者諸賢の皆様の中にも居士の画像を所持されている方は多いと思います。

ところで、利休居士の法要とは違ってそれぞれに自分の範囲内で法要に合わせた茶会をされている方は多いと思います。京都の古美術商のO氏などは、父母の一周忌、三回忌、七回忌と続けて大変素晴らしい追善の道具を使った茶事をされますが、本年四月はご尊父の十三回忌にあたるこのことで、お招きを受けてお

ります。O氏の話によれば、茶が好きだった両親の法要と茶事を、こうしてキチンとしてしていると、通常ではあり得ないことが起きてくるというから不思議です。

追善・法要の茶会となれば、追善する方の縁の道具がどこかに使われているのが大方の決まりでありましょう。平成十九年(2007)には元伯宗且居士の三百年忌の法要と茶会が厳修されましたので、招かれた方もあったと思いますが、すべての席に宗且道具が使用されておりました。

伊木三猿齋を偲んで

私も先年のことですが、備前国池田藩の筆頭家老であった伊木三猿齋の記念茶室「三猿堂」を守るための「和楽茶会」の濃茶席を担当させていただきました。

三猿齋といえは、裏千家十一代玄々齋精中と親しかった人物で、伊木家の中には裏千家の多くの茶席を写すことが許されていたといわれます。そのなかの一つが利休御祖堂です。すなわち伊木家の祖堂には裏千家

の祖堂に祀られている利休居士の木像が写されて安置されていたのです。

大徳寺山門の利休居士の木像事件は、周知の通りです。居士の賜死後、山門からおろされた木像を祀っているのが裏千家の御祖堂です。それ以降、江戸時代を通じて大徳寺の山門には、金毛閣を寄進した壇越利休居士の木像が置かれることはありませんでした。

利休居士二百五十年忌にあたる天保十一年(1840)、玄々斎は御祖堂に祀ってある利休像の頭部を模刻させました。そして明治二年(1869)、玄々斎はその頭部を、茶道執心の三猿斎に譲ることにし、居士像は全体像に整えられ、三猿斎の荒手屋敷の御祖堂に祀られることになったのです。

しかし明治維新を迎えて幕藩体制が瓦解してしまい、伊木家も昔のままの姿を保つていくことが困難になりました。維新後は神仏分離令が出され、廃仏毀釈の世相の中で、多くの寺院や仏像が壊されてしまい、風呂屋の薪にされたとまでいわれる時代です。伊木家

でも、三猿斎が没した翌年の明治二十年(1887)、三猿斎の遺志に従って、伊木家の利休居士像は大徳寺に寄進され、山門に安置して開眼供養が行われました。

ところで、玄々斎が裏千家の茶席の写しを許すほどの関係であった伊木三猿斎とは、いかなる人物なのでしょう。伊木家は代々池田家の筆頭家老職として虫明の地、三万三千石の禄を食んで参りました。三猿斎は文政元年(1818)に生まれて忠澄を名乗り、三猿斎宗玄・宗愚・宗間などと号します。はじめ速水流三代宗寛に茶を学んでいましたが、玄々斎に傾倒して厚



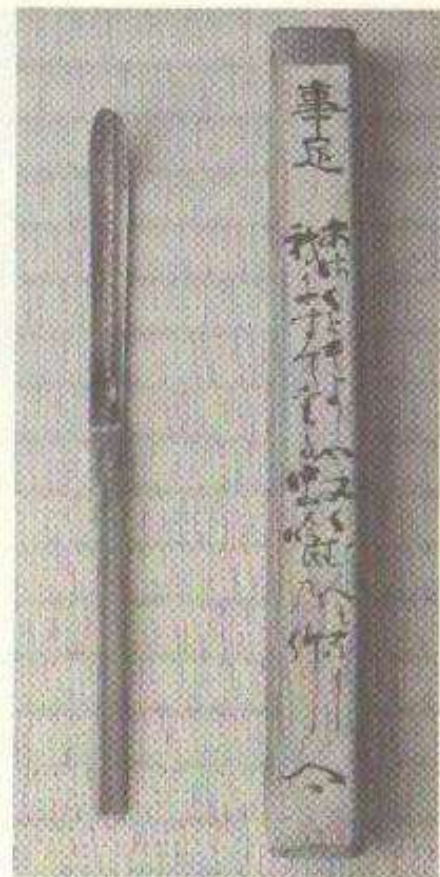
少林寺の茶室、三猿堂

い交流が図られ、荒手屋敷に裏千家の茶室を写すことにまでなるわけです。三猿斎で最も知られているのは庭焼としての虫明焼です。伊木家では江戸中期から庭

焼を始めますが、途絶えたりしながらも三度目の開窯を果たしたのは弘化四年（1847）に初代清風与平を招いてからのことでした。その後、真葛長造や初代宮川香山なども来窯して作陶を続けています。

虫明焼の茶道具中最も名高いのは、なんといっても三島写の四方水指でしょう。本歌は千家二代の少庵宗淳がかつて所持していた高麗三島の水指で、少庵二百五十年忌にあたる文久三年（1863）に玄々斎が三猿斎と相談して三十個造らせました。

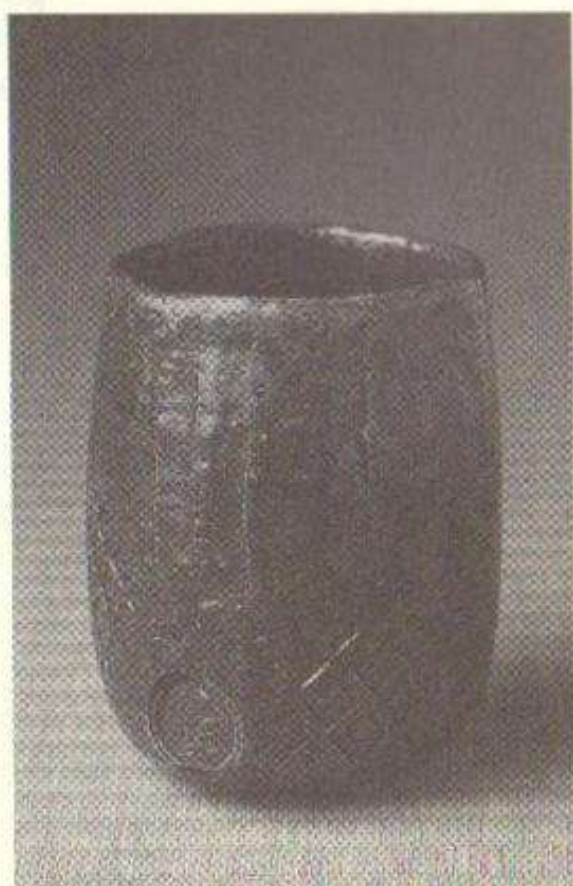
伊木家が虫明焼を開窯した意図は不明です。当初は殖産のための方策であったのかもしれませんが、しかし、池田藩の命によって初期の窯は閉じていますので藩のための殖産でないことは明らかです。池田家には備前焼があるから当然です。まして三猿斎は、閉じていた虫明焼を再開するのだから、大きな目論見があったことも事実でしょう。三猿斎は嘉永六年（1853）に黒船来航による沿岸防備を命じられ、安房、上総まで赴いています。その折には道具商の隅屋常次郎（樂陀）を



三猿斎作茶杓 歌銘「事足」

伴っており、道具の購入や茶会なども催したといわれます。また、幕府の長州征伐に反対するなどして長州藩との関係を凶り、慶応年間には、坂本龍馬らも三猿斎を頼っています。

明治以後、全国の大名家が瓦解していったなかで、明治四年（1871）には岡山県大参事となるも間もなく辞職、児島湾干拓事業などを手がけて伊木社まで結社しますが失敗し、失意の内に明治十九年（1886）三月二十日に六十九歳で亡くなり、岡山の少林寺に葬られます。少林寺は備前国の臨濟宗の名刹で、庭は遠州流の作と伝えられており、かつては曙椿の原木があ



三猿齋手捻りの茶碗、銘「みのむし」

って、この寺から全国へ波及したそうです。そうした意味もあって、このたびの茶会では、曙椿を生けました。また、寺内の「三猿堂」は三猿齋を偲ぶために建てられた二畳台目の小間で、堂内に三猿齋の坐像が安置されています。ところが、現在では損傷が激しく、数年前から所の医師・河田宗隆氏が中心になって保存のための茶会を年一回行っているうちの一回を担当させていただけでした。河田氏は三猿齋直筆や手造りのものなどを所持しておられて、縁のものを使われ

ておりました。その代表が三猿堂の掛物です。魚籃観音ぎょらんくわんの絵は清風与平、賛の般若心経は、三猿齋の手になるものです。茶杓は三猿齋作になる「事足」の歌銘。自詠の和歌は「あさくともよしや又くむ人もなし 我にすてたる虫喰の竹」とあって、權先の撓ため具合は浅く、節先に大きな虫食いのある竹を使っております。捨てられたものを捨うのが自身の役割であるという認識は、後年兎島湾の干拓事業に心身をすり減らしている自身の感慨でしょうか。また寒い時期とて、三猿齋手捻りの赤楽茶碗が使われておりました。三猿齋自身が「みのむし」と銘した筒茶碗であり、いかにも寒さを堪えた糞虫が、自分の殻に閉じ籠こもっているかのような雰囲気を感じさせてくれる茶碗です。

法要や追善の茶会ではすぐに「夢」の字が頭に浮かぶに違いありません。「夢」の一字が悪いわけではありませんが、いつも、どこでも同じでは飽きてしまいます。なんといいっても縁の物がよいのですが、自分自身にしか分からない器物は面白くないと思います。